

編集 後記

前回編集後記を書かせていただきました2009年10月号は、新政権発足後最初の号でした。その際、Policy makerは、政策をタイミングよく打ち出すことが求められるが、Researcherは、考える時間をかけ、妥当性のある真実を追究することが重要であり、政局に左右されない大局的な公衆衛生学を—と書かせていただきました。あれから、2年。未曾有の震災・原発事故を含め、政局は多くの難題を抱えた日々となっています。

今回の震災では、行政の対応を待てない状況の中、住民たちの自主的な行動が功を奏した事例が多く紹介されています。また、今回の介護保険法の改正も、制度に頼らない地域の力が必須なものとなりました。

今、あらためて公衆衛生学の意味を思うとき、上述の大局的視点に加えて、政策の目が届かない部分への視点も、公衆衛生学として大変重要であると思えます。

さて、本号では、地域での6年間のコホート調査による精神的健康の意義を示した研究、ゲイ・バイセクシャルの保健行動研究の2本の原著論文をはじめ、親子保健、精神保健の地域に根ざした論考、そして多彩な連載記事が掲載されています。思えば、こうした多様な視点の課題を掲載しうる医学系学術誌は、他にないのではないでしょうか。そして、そこに科学性を保てるよう、編集委員会一同もバランスを考え努力しております。

先日、在宅医の方々とお食事会の中で、「大学は最先端の科学への研究・教育を重視しているが、我々に必要なのは地域の最前線における科学だ！」という話でもりあがりました。そして、「それこそ、まさに公衆衛生学！」と宣伝させていただきました。今回の震災・原発事故でも、待ったなしでの行動が求められました。また、最前線では、本号の論文にもありますように数の論理の影にある minority のニーズを見逃せません。“最前線の科学”としての公衆衛生学を、会員の皆さまとともに築いていければと感じております。（田宮菜奈子）

次号予告（第58巻・第8号）

原著

- 認知症高齢者グループホームのケアスタッフが抱える困難とその関連要因……………古村美津代
首都圏における児童生徒の Well-Being と保護者の認識との関連と構造……………中山直子, 他
男性家族介護者の心身の主観的健康特性……………永井邦芳, 他
健康推進員のエンパワメント評価尺度の開発と信頼性・妥当性の検討……………小山 歌子, 他

研究ノート

- 出産後における踵骨超音波骨量の変化について……………田辺里枝子, 他

連載

- ヘルスサービスリサーチ(13)……………伊藤智子, 他
社会と健康を科学するパブリックヘルス(9)……………中山健夫